文献紹介

住　宏平著　障害児—その言語と認知—

藤　井　　稔

ときあたかも国際障害者年を迎えるに当り、本書の出版は時宜にかなったものといえよう。しかし、本書は時勢に便乗した安価なものでは勿論ない。著者の長年に渡る研究の成果この一書に凝縮。本邦はもとより、英米独仏露に及ぶ文献を渉猟し、その該博な知識により、障害児全体に通ずる問題領域、「学習」、「言語」、「適応」の諸問題を、「言語と認知」という心理学的研究の枠組みにおいて整理している。

およそ障害児に係わるものは、一時の感激、熱意のみで事に当ることあらば、やがて挫折し、去るであろう。障害児の理解は息長く、続けられることこそ肝要。そのためには障害児についての現在まで積み重ねられてきた先人達の業績を詳しく知ることもその一つ。よって障害児に係わるものは一度は本書を通読してもよいであろう。

最近、久しくタブー視されていた〝心とは何か〟という問題が再び論義されようとしている。これは一つには次のような事情によるのかもしれない。すなわち、心身一元論の立場から、脳の研究を進めてきたその道の第一人者の一人Penfield, W. が死の前年に公けにしたThe Mystery of the Mind（1975）（塚田・山河訳　脳と心の正体、1977）において、こともあろうに心身二元論に想いを寄せたことである。それによって追従者達はあわてふためいた。Penfield としたことが遅すぎた観もあるが、そもそも科学的研究における哲学的、あるいは倫理学的省察はその前提であって、結果についてなされるものではないであろう。最近の公害抑止、生命倫理（Bioethics）の問題も哲学、あるいは倫理学の欠除した技術の先走りを懸命にくい止める手段として仕方のないだけのことである。実は研究そのものの前提としての哲学、あるいは倫理学が自明なものとしてではなく、顕現的に問われなければならない。このことこそ「心とは何か」を問い、その研究の方向を定めるに当って努めなければならないことであろう。

かって、障害児は心なきもの、あるいは正常児とは異なる心の持主と考えられているときがあった。著者は先ず、障害児の研究の方向と態度について次の如く述べている。「その欠陥の事実からくる行動における特殊と見られる性質は、普通児からの量的差異にすぎないとみなされるようになった。かくて障害児の問題は結局普通児の問題となるといってよいであろう。……障害児の特殊性の問題は一般的にいえば個人差一般という一般的問題の一部であって、一人一人の子どものよりよき理解のために必要なものであると見ることができる。特殊児の教育は、決して普通児の教育から遊離したものではない。」と。

〝異常〟という概念についての歴史的概観から、著者はまた、「正常な特性も異常な特性も質的には同じである。したがって正常者と異常者との間には、発達についても学習についても異なる法則が適用されることにはならない。」と述べている。

そして教育指導の技術や教育の制度が、その

ままでは発達を停止させ、歪みを与え、逆転させる過程を、より前進的過程に変えうることも示唆し、「子どもは環境との相互作用を通じて感覚過程と思考過程が活発化されないとその生得的な知的可能性を実現できない。」と述べている。

次に著者は障害児の発達遅滞の問題点を明かにするため、発達的研究から、思考、言語、認知の相互の関係をKendler, H. H, & T. S.,Piaget, J., やVigotsky, L. S.らの研究を引いて整理している。これはこの次に詳しく述べられる「精神遅滞児」、「ろう児」、「環境障害児」における現時点での問題を明かにするための枠組みになるのであろうが、諸家の学説一点に定まらず、読者にかえって混乱を招く恐れもある。それは一つには本書の鍵概念ともいうべき「言語」、「認知」の概念規定が諸家において一致しているとはいいがたく、むしろ諸家それぞれにおいてもその概念規定がはなはだ曖昧である場合もあるからである。したがって読者は諸家の学説にとらわれることなく、特論ともいうべき、「精神遅滞児」「ろう児」「環境障害児」において示される実験的研究の結果を素直に見比べて、障害児の現時点での問題を見いだすのがよいであろう。また障害児を通じて、言語、認知の概念の曖昧さが露呈し、それによってそれらの概念はより一層明確化されることにもなる。これらの章では障害児の問題点のみならず、現時点での障害児の特性は、前述の如く、環境との相互関係において変化する可能性のあることを示唆している。

本書はまえがきで著者も書いている如く、障害児固有の問題というより、むしろ「発達心理学特殊講義」と名付けてもよいのであるが、障害児研究のハンドブックの一部として利用することもできよう。

いずれにしても、ここで述べられた諸研究（著者自身の研究も含めて）の成果は障害児教育の実践に際しての仮説として採用され、試めされるべきものである。環境との相互作用といっても、単に周囲の環境を整備、充実するだけでは充分ではなく、心理学的にはむしろ障害児への積極的働きかけの技術の向上がなされなければならない。それには本書に入って、本書を出、心静能処事こそ肝要。それはこれからのわれわれの時間をかけた作業でもある。そしてそのことは障害児特有の教育に止まらず、人間一般の教育についての知見を附け加えてくれるはずである。

田中欣和編著『解放教育論再考』

海老原　治善

本書は、編著者によれば、「最近、解放教育運動関係者のあいだで『もう一度考えよう』と語られることが多いが、それはむしろ積極的なあるきざしであると私は思う。本書の題名もその意味からである。おのれの課題として『再考』も、『中間総括』しようということである」（まえがき）との意図で編集されたものである。

全体は二部で構成され、第一部は、田中氏の論稿で、その構成はつぎのとおりである。

Ⅰ　今日の部落差別

Ⅱ　解放の学力をめざすということ

Ⅲ　部落解放理論の現段階